さ　ぬき　く　み　こ
佐　貫　久美子

学 位 の 種 類　　博士（教育情報学）

学 位 記 番 号　　教情博　第　52　号

学位授与年月日　　令和４年６月 15 日

学位授与の要件　　学位規則第４条１項該当

研 究 科 ・ 専 攻　　東北大学大学院教育情報学教育部（博士課程後期３年の課程）
教育情報学専攻

学 位 論 文 題 目　　標準模擬患者養成に関する研究
―工学的手法の適用による効率的・効果的な方法の構築―

論 文 審 査 委 員　　（主査）
准教授　中　島　　平　　教　授　熊　井　正　之
教　授　渡　部　信　一

〈論 文 内 容 の 要 旨〉

医療系大学・学部では共用試験が行われており、その試験には標準模擬患者が活用されている。共用試験の実技試験 OSCE において課題として患者役を行う標準模擬患者は、試験の信頼性を確保するために標準化された演技を行う事が求められている。標準化とは、演技に「一定の基準を設けて、同じ条件で、同じように対応出来ること」とする。

標準模擬患者の養成には、同じ間違いを繰り返し誤答の修正に時間がかかること、また、練習を繰り返しても自身の演技が十分な標準化に達していないのではないかと不安を感じたまま試験に参加していること、などの問題点が見られた。筆者は模擬患者の養成を行いながら、それらの問題に対処する練習方法を模索していた。本研究の目的は、模擬患者が抱えている標準模擬患者を演じる際の問題点を明らかにし、それらに対処する ICT 機器を活用した練習方法を考案し、実践と評価を行い、標準模擬患者養成に対する新たな知見を明らかにすることである。

最初に、模擬患者が感じている演技の難しさを明らかにする。まず、第二章では一般模擬患者を演じる際の難しさに関して KJ 法を用いて明らかにした。その結果、模擬患者は「リ

アルな患者」を演じることと「教材として演じること」のバランスを図りながら演技を行うことに難しさを感じていることが示唆された。次に第三章では、初めて標準化を行う模擬患者の誤答内容を分類し要因を検討することを通して、演技の標準化の難しさを明らかにした。その結果、シナリオの暗記が不十分であったこと、標準化特有の決まり事への理解が不十分であったこと、さらにシナリオ記載の質問内容と模擬患者の質問の解釈に齟齬があったことが示唆された。

次に、標準化を目的とした練習方法を考案し、実践と評価を行った。第四章では、回答の導き出し方に着目した。練習では、セリフは暗記しているが、質問に対し適切な回答が出来ない場面が見受けられた。それの対処するためには、質問の言葉の意味を熟考するのではなく質問の主旨を把握しカテゴリーに分類しそれに紐付けされた回答を行う回答方法が有効であると考え実践を行った。この回答の導き出し方を実践した模擬患者から、カテゴリー化を用いた回答の導き出し方に対して概ね肯定的な意見が得られた。

次に第五章では、ロールプレイで活用する練習方法として ICT 機器を活用した練習を提案し、実践と評価を行った。その結果、模擬患者からは OSCE では標準化された演技ができたこと、更に標準化のためには必要な練習であり、今後も継続したいとの評価を得た。これらの結果から、標準化が促進された要因は ICT 機器の活用により回答の可視化と共有が行われたことにあることが示唆された。

筆者の所属する団体では、実践した練習方法を継続していた。その結果、まず、同じ間違いを繰り返すことは頻繁には見られなくなった。これは、練習方法の変化により誤答に対して明確な正答が得られるようになったこと、更に、誤答や疑問が発生した際に迅速に協議が行われ、誤答が修正されることから正答が定着し易くなったことが要因と考える。次に、標準化への不安が払拭できない点に関しては、不安を訴える発言が見られなくなった。これは練習日の最終段階に行う練習により、全員の回答が標準化されていることを認識出来るようになったことが要因ではないかと考える。最後に、標準化に時間がかかる点に関しては、練習時間が減少したことから解決できたと考える。その要因として、既に述べたように、練習により標準化の完了を認識できることから標準化への不安が解消できることにより、模擬患者が納得して練習を終了することが出来るようになったことが挙げられる。

本研究で行った実践から、模擬患者の標準化を目的とした練習には、回答とフィードバックを可視化し共有を行い、誤答や疑問点に対して協議を行うことが重要であることが示唆された。更に、標準化を促進するためには要約力と自己モニタリングのスキルの活用が肝要であると考える。

〈論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨〉

本論文は、国内医学部で行われている共用試験 OSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）における医療面接課題で活用されている、標準模擬患者の養成をテーマとしている。具体的には、筆者自身がおよそ 18 年間模擬患者として活動

し、さらに同時に模擬患者養成者として 15 年間実践を行なってきた経験を元に、模擬患者の感じる困難点を明らかにし、模擬患者と養成者双方にとって効果的で持続可能な模擬患者養成方法の実践と評価を行なっている。

本論文においてはまず、初学者の困難点として、事前に与えられたシナリオから逸脱せず、想定外の質問にも即答を要求される標準模擬患者特有のコミュニケーションの技術的側面を明らかにしている。次に、得られた知見をもとに、二つの新たな標準模擬患者の練習方法を開発し、その実践と評価を行なっている。ひとつ目は、医師役の質問内容を要約・カテゴリー化し、そのカテゴリーに対応した回答をすることで、想定外の質問の解釈ミスを軽減しつつ円滑な回答を行う方法である。二つ目は、情報通信技術を活用し、複数の模擬患者の回答を同時に可視化するとともに、回答の正否をリアルタイムに参加者がモニタリングすることで、グループとしてミスに気づきやすくそれを修正しやすい学習環境を提供している。総合考察においては、研究当初の練習方法がどのように変化し、模擬患者の抱えていた問題がどのようにどの程度解決したのかを検討している。

審査の結果、本論文が、標準模擬患者の養成において、約５年間に渡って解決できなかった、模擬患者が①同じ間違いを繰り返す②標準化に不安を感じたまま OSCE に臨む③標準化まで時間がかかる問題を解決する方法を示しているだけでなく、その解決が、模擬患者グループによる共同学習と、個々人の要約力と自己モニタリング力に支えられていることを示し、さらに他のコミュニケーショントレーニングにも応用し得る点が高く評価された。また、常に現場で観察・実践・改善を行なってきて得られた知見が提示されているため、現在模擬患者養成で困難を抱えていたり、今後養成を行おうとするグループに直接役立ち得ることも評価された。

一方で、いくつかの課題も残されている。得られた知見のより詳細な理論的な位置づけに関する議論が望まれること、単一事例の検討にとどまることから、他のグループで導入する場合に想定される困難点の検討、当事者として関わったことが実践に与えた影響の検討が望まれることなどである。

とはいえ、模擬患者かつ模擬患者養成者である筆者が、10 年以上の経験を通して効果的で持続可能な模擬患者養成方法を詳細に検討・評価した知見は他に見られず、指摘された課題を考慮しても本論文の学術的意義及び実践的意義は十分に水準を満たしていると判断する。

よって、本論文は博士（教育情報学）の学位論文として合格と認める。